

## 武蔵野日曜聖書講筈

## キリスト対サタン

## ——マタイ伝第4章1～11節——

1989年9月10日

小池辰雄

凄いドラマ 聖霊に導かれて 飢えることなき断食 石をパンと為らしめよ エン・クリスト  
 霊言 祈入読入 キリスト対サタン 矛盾における魂の為楽 「主さま！」の一言 人生の大  
 肯定 神のもの 詩「人は誰しも」(召団讃歌A55) (参考)「8月2日」雲散霧消の賄罪(イザヤ  
 43、44)

## 【マタイ4】

1ここにイエス御霊によりて荒野に導かれ給う、悪魔に試みられんと為る  
 なり。2四十日、四十夜、断食して、後に飢えたもう。3試むる者きたりて言  
 う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』4答え  
 て言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出する凡て  
 の言に由る』と録されたり』5ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮  
 の頂上に立たせて言う、6『なんじ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。  
 それは「なんじの為に御使たちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支え、その足  
 を石にうち当つること勿らしめん』と録されたるなり』7イエス言いたもう『主  
 なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』8悪魔またイエスを最高  
 き山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華とを示して言う、9『なん  
 じ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与えん』10ここにイエス言  
 給う『サタンよ、退け』主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事え奉るべし』  
 と録されたるなり』11ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち来り事えぬ。

## ●凄いドラマ

キリスト対サタンの記事は、マタイ伝では4章1～11節、マルコ伝では1章12～13節、  
 ルカ伝では4章1～13節に、この三つの共観福音書に出ているわけです。マルコ伝は短い。  
 マタイ伝とルカ伝は非常に並行しています。

では、マタイ伝4章に入ります。

1ここにイエス御霊によりて荒野に導かれ給う、悪魔に試みられんと為る  
 なり。2四十日、四十夜、断食して、後に飢えたもう。



マルコ伝の方は、

「<sup>12</sup>斯て御霊ただちにイエスを荒野に逐いやる。<sup>13</sup>荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獣とともに居給う、御使たち之に事えぬ。」(マルコ1・12～13)

と、マルコ伝は非常に端的な表現です。マタイ伝はやっぱり多少、説明的なんだ。マルコ伝というのは非常に劇的に書いてある。

これは凄いやドラマなんですけれども、実に簡明に書いてある。聖書は本当に無駄なことは言わん。大したもんですよ、この聖書というのは。だから、文章は余りくたくだ長くない方がいい。私もこの著作集第十巻は一頁に集約させて書いたんで、かえってよかった。

### ●聖霊に導かれて

ギリシヤ語の聖書では、「サタン」は「ディアボロス」と書いてある。「ディアボロス」というのは、「人を誘<sup>そし</sup>るもの、悪意をもって訴えるもの」という嫌らしい内容の言葉です。「ディア」というのは「二つに割る」という意味で、神さまとの関係を誘<sup>そし</sup>って、割るようなやつです。ヘブライ語では「サターン」、キリストの母語のアラム語では「サター」という。「サタン」とは「敵するもの」という意味です。争い敵するもの、仇敵です。「ディアボロス」の方は、<sup>ひぼう</sup>誹謗する者、悪口や陰口を言ったりする者。

「キリストは御霊によりて荒野に導かれた」

とある。これは非常に大事なことです。聖霊に導かれていいるから、この戦いは必ず勝つ。

私はダンテやゲーテとちがって、女性に導かれない。聖霊に導かれて、私の詩は書いています。わが導者は聖霊です。また、御霊に導かれなければ、どうにもならない人間ですから、しょうがないんです。偉くもなんともない。しょうがないやつだから、御霊に導かれる。でなければ、サタンに負けてしまう。サタンとの一騎打ちをして完全に勝ったこのキリストが土台です。

### ●飢えることなき断食

しかも、荒野で

「四十日、四十夜、断食した」

というんだから凄い。水も飲まないよ、これは。雨水は降ってきたかなんか知りませんがれども。こんな断食はもうとても考えられない。インドの独立をやったガンジーの断食は七十日。凄いやつだね、ガンジーというのは。まったく無的でもって、本当の無手勝流だ。そして、インドを独立させてしまったんだから。自分はもちろん道に殉じた死に方をした。キリスト、ガンジーは、戦いだね、戦いの世界です。お釈迦さんは、戦いでなくて悟りだ。それはもちろんお釈迦さんも悪魔と戦ったんだけど。

断食というのは、なにか修行しようと思つて断食したって悪くはない。したい時にはし



たつていい。断食する時には、水は飲む。水はキリストの霊だと。

「我があたる水を飲む者は、永遠に渴くことなし」(ヨハネ4・14)

とキリストが言われた。水を飲みながら、キリストという水を飲んで——サマリヤの女ではないけれども——渴くことのない水を飲む。渴くことなき水、飢えることなき断食。キリストを食らう。

「我を食らえ、我を飲め」

と言う。「我を食らえ、我を飲め」が断食の本当の精神だ。いわゆる我慢するのではない。キリストを飲み、キリストを食らうんだ。キリストはやはり、神さまを食べていたんだらうね。神の霊気を吸って、霊水を飲んでいたようなひとだ。だから、キリストも断食できたので、我慢して断食したのではない。

●石をパンと為らしめよ

<sup>3</sup>試むる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』

サタンは、あそこに在る丸い石ころはまるでパンみたいな形をしていますから、  
「この石ころをパンに変えたらどうだ」

なんて言った。キリストはもちろん飢えておられるから、そこにつけ込んだわけだ。サタンというのは悪知恵を持っているから。

ダンテの『神曲』の第一曲に出てくる例の三つの動物——エレミヤ記からだったね——豹と獅子と狼、これはみなサタンの使いです。豹は肉欲の象徴、獅子は権力欲、牝狼は貪欲です。

封建時代の権力、徳川三百年なんてものは、ある意味において暗黒時代だね。代官なんて悪いことばかりした。「水戸黄門」にも出てくるけれども。あれは象徴的な劇だ。権力でもって要するに庶民を押さえていたわけだ。だから、庶民は本当に涙を流し、血を流した。私はそういう意味で、徳川時代は暗黒時代とはつきり思った。これは獅子、権力のせいです。

あとは人間の諸々の欲。土地問題でも、日本では欲がからんで、土地の暴騰は世界でも考えられないような事態です。世界中、自然がおかしくなつて、酸性の雨が降る。21世紀は、動物界、植物界がおかしくなつて——戦争どころでない——人間自身がそれで参つてしまふ。

●エン・クリスト

この美しい天体を害したのは結局、人間の罪です。動物や植物が悪いのではない。結局は、どうしようもない人間の罪。それが滅びを刈り取るわけだ。だからもう、人類は、特に政治家は、神のもとへ立ち帰らないことにはダメなんだ。単なる教育ではない。



だから、我々、この福音をいただいた者は烈々たる魂で生きなければダメです。私は「烈々」という言葉が大好きです。いろんなことにでつくわすと、逆に聖霊は働きたもうから、ありがたくてしようがない。絶対に行き詰まらない。本当です。どう取り扱われようが、何と言われようが、一向差し支えない。逆に力がくるからね。本当は、天下無敵なんだ。サタンなんかはもう、このキリストがやつつけてくださった。だから、このキリストの中に自分を投げ入れなければ、サタンに勝てない。サタンと自分が一騎打しようとしたってダメです。キリストの中に自分を投げ入れる。まさにエン・クリスト（キリストの中に）なんです。エン・クリストはお題目ではないですよ、これは現実です。信仰の世界は全部現の世界ですから。

「私は信じています」

なんて、そんな世界ではない。

「これは現実である」

と、はつきり言わなければダメなんです。

### ● 霊言

4 答えて言い給う 『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出る  
凡ての言に由る』と録されたり』

とキリストは答えた。「御言、御言」とよく言う。もったいぶる必要はないんですよ、この「御言」というのは。私は「御言」の「御」の字は、「霊」の字を書く。「霊言」です。神の、この聖書の言を直ちに霊言として、その言から力を受けとらなかつたならば、本当は読んでいない。意味ではない。力なんです、光なんです、生命なんです。本当の義なんです、本当の愛なんです。

「これはどういう意味だ」

なんて、いくら詮索したってダメだ。聖書の言は、そういう力ある響きなんです。

聖書の言は神の根源語の表現なんです。ギリシヤ語でもヘブライ語でもない。日本語でもない。もちろん、日本語、ギリシヤ語、ヘブライ語、何語でもいいですよ。それを通して、神の根源語がその奥から語っている。だから、霊言だと言っている。キリストは本当に霊言の他は語らなかつたんだ。「起きよ！」と言えば、死人が起き上がってくるんだ。「開け！」と言えば、眼が開いてしまうんだから。大変なものですよ。

仏教でも何でもいいよ。私は、「キリスト教、仏教」なんて二段構えに分けてなんかいない。全部、吞んでしまっている。仏教のいいものがあつたら、大いにそれは咀嚼しなければ。私は、空海だの親鸞だの白隠だのが好きだから、彼らを読めば、それだけまた力をいただきます。これはみんな、キリストをいただいているからできる。キリストというひとは東西を、本当の意味で、融合できるんです。



「そのいかばかりなるかは測りしれない」(エペソ3:18～19)  
という。パウロはもう圧倒されているんだ、キリストに。私も質的にはパウロと同じように圧倒されている。圧倒されて生きている。

「私の信仰は(こう)こうで(ご)ざいます」  
なんて、ひとつも言っていない。

「信仰なんかありません。ただ、キリストに圧倒されて生きているだけです」  
と言っている。だから、サタンに勝てるんだよ。

まあ、私は80歳を過ぎて、そんな境地に正直いますから。あなた方は、一足飛びにそこまで行かなくなつていいよ。参考に申し上げておくから。しかし、一足飛びに来たければ、来たつていい。もう、天界の現実にいるんだ。それでは「私は聖人か」と。聖人でも何でもない。私は罪びとにすぎない。けれども、もう、「自分」なんかは問題にしてないですから。

### ● 祈り読入

イザヤ書を読んでごらん。全イザヤ書に聖書全巻の真理が全部語られている。驚くべきところだね、イザヤ書というのは。旧約聖書でもし一巻を選べと言われたら、私は文句なしにイザヤ書を選ぶ。詩篇ではない。イザヤ書だ。それくらい旧約のイザヤ書というのは凄い。あなた方、イザヤ書を自分で写して、暗記するように読んでごらん。

この集会のない時にはとにかく、

「今日は私はヨハネ伝ばかり読むぞ」

とか、

「(こ)を本当に筆写するぞ」

とか、何かやりなさいよ。体裁の世界ではないんだから。身体そのものが活ける文字とならなければ、「信仰」なんて言つたつて、くだらないんだ、つまらないんだ。いい加減なクリスチャンよりか、普通の人間の方がよっぽどいいよ。キリストが、

「汝らは世の光、地の塩だ」(マタイ5:13～14)

と言った。塩が塩分を失つたらおしまいだ。ところが、海の中には塩が溶けているが、その海の塩もおかしくするようなことではしょうがない。文明の行き過ぎは困ったもんだね。結局、欲がからんでいるから。欲がからんでガタガタしているのは、みんなこれはサタンの手下になつていっているわけだ。豹と獅子と狼にやつつけられてしまう。それはみんなサタンの子分たちにやつつけられる。ダンテも、しょうがないから、

「俺は別な道を通らなければならぬ」

と。それがダンテの詩だね。まず地獄を通つて、いろいろな地獄の悪いやつにおいて、自分のある姿も見ていたわけだ。煉獄で戦つて、とうとう天国に至る。私もある旅をするんです。中身は言いません。



「神の言」と言っただけで、ただ「言葉」と思って読んでいたらダメですよ。私たちには「キリストの言」です。神・キリストの旧約・新約聖書の言葉は——旧約には制限しなければならぬ言葉もあるけれども——新約には本当に無駄がない。その言は直ちに力となる。

「力とならなかつたら本当は読んでいない」

と、これははっきり自覚してください。それを読むためには折入、読入する。「入」とはみな、自分の身体をキリストの中に投げ入れる」

ことです。そこらの信仰とははっきり違うんだから。二段構えで

「私の信仰は」

なんて言っている世界ではないんだ。いいですね。そうしたら、力が来て、疲れを知らない人になる。

## ●キリスト対サタン

第十卷『聖書は大ドラマである』の「キリスト対サタン」(9月6日)の項を読みます。

「4人の生くるはパンのみに由るのではない、神の口から発するすべての言葉に由る」(マタイ4・4)

「7汝は汝の主たる神を試みてはならない」(マタイ4・7)

「10サタンよ退け!『汝の主たる神を拝して、彼にのみ仕えよ』と録されてある」(マタイ4・10)

聖霊の人イエスは伝道に乗り出す前にサタンとの一騎打をしてこれにうち勝つを要した。彼はまず荒野で四十日四十夜断食して飢え給った。狡知なサタンはイエスに「もしあなたが神の子だというなら、これらの石がパンに成るように命じなさいよ」と言った。これに対してイエスは右掲第四節の言(申8・3)で応じた。人間は霊肉不可離の存在であるが、魂の問題は普通棚あげになっている。しかしイエスは神の言をパンより重視した。神の言は霊的な生命力を与えるからである。このことは聖霊を受けるによく解る。肉体が空気を必要とする以上に人間の魂は神の霊気をもった霊言を要する。経済問題で負けたサタンは次に宗教問題をもちかけた。即ちイエスを霊にて神殿の頂上に伴れて来て、神の子ならそこから跳び降りても天使が助けてくれるからやったら好い、と唆した。イエスはこれに対して第七節の言で応えた。

これは

「汝は汝の主たる神を試みてはならない」(申命記6・16)

という言葉です。

奇蹟や御利益を求めて神意を求めない宗教を拒否した。

今度は宗教問題です。奇蹟や御利益でもなければ、観念でもない。サタンは巧妙にやってくる。サタンというやつは旧約の御言を逆用するから。



神意体现ということがキリストの姿であった。神の意思を受けとって、そこに生きるのが本当の福音の世界だと。

「聖意を為させたまえ。この私をどうぞお使いください」  
 というのがキリストの宗教だ。

「あなたの意思が必ず成ってください。どうぞ、この私をお使いください」と、提身しているわけだ。必ず力がくるんです。提身しなければ、力は来ないんです。なにか偉そうに提身するのでも何でもありません。こっちの意思ではない。神さまの意思が力を持つているから。要するに、

「福音は言葉にあらずして、力なり」

とパウロが言ったのがそのことです。人を活かす力であって、倒す力ではない。サタンをやっつける力であるけれども。

皆さんは、集会でこうやって私がいろいろ叫んでいるのだが、一緒にその世界に入っているんでしょね。

「先生は一人でいい気になっている」

なんて、そうじゃないよ。「然り、アーメン」と、一緒にその世界に入ってくれなければ、おもしろくないんだ。畏<sup>かしこ</sup>まって聞いていたのではダメだよ。

「いや、私はそこまでまだ行ってません」

と、そんなことを考えるからいかん。そんなことは考えなくていいから。直ちに受けとっていくんですよ。空気を考えて吸っていますか？ 無意識で吸っている。「我思うゆえに我あり」ではないんです。「思う」なんていう世界ではない。即、受けとる世界なんだ。体受、身体で受けとる世界です。使徒たちの信仰は直結の事態ですからね。

どんなことが起きようが、何があつたつて、大丈夫だよ。キリストを生きるために、いろいろなることが、ドラマが起きるんだ。いいよ、そんなことはどうだつて。キリストを受けそこなつたら、どんなに得しようが、どんなに幸いに見えようが、ちつとも幸いではない。本当の幸いは、山上のキリストの言葉、

「恵福なるかな。霊の貧しき者、天国は——私が天国だよ——私はお前の中にいるよ」ということです。

次にサタンは政治問題をもちかけて、現世に勢力を擅<sup>ほしいまま</sup>にしているサタンに拝跪<sup>はいき</sup>すれば全世界をやると言った。これに対してイエスは第十節の「サタンよ退け…」で応じた。我々にとっては神に仕えるか、サタンに拝跪するかで、天国ゆきとなるか地獄ゆきとなるかである。「第十卷『聖書は大ドラマである』の「9月6日 キリスト対サタン」の項）これは、

「サタンよ退け！『汝の主たる神を拜して、彼にのみ仕えよ』（申6・13）と録されてある」



という言葉です。ところが、

「天国にも地獄にも入れないやつがいる」

とダンテが言った。それは曖昧なやつです。良くもなければ悪くもない。日和見みたいなやつ。そういう

「曖昧な人間がいかに大勢いるかということ、あきれた」とダンテは言っている。

「あんなものは、ただ見て過ぎよ」

なんて書いてある。とにかく、『神曲』というのはいすごい。あれは、ダンテは流竄るざんの19年で流浪しながら書いた本だから。それはかなりあるところでは停滞はしていましたが、でも。ダンテも、聖霊に本当に導かれれば、この三つの動物に勝って、いきなり光の山に登れた。ところが、そうじゃなくて、地獄と煉獄を通って、最後に天国に到ることになっている。

### ●矛盾における魂の為楽

私は今度、『エン・クリスト』誌40号に「矛盾における魂の為楽いらく」というソネット(独和対照)を書いたので、紹介します。「為楽」という言葉は法然の言葉からとっている。

「キリストが今日私を恵み深くも樂園に招き給はば、

私は直ちに帰天しよつ深き感謝を以て。

「今日、お前は来い」と仰ったら、もう今日、さつそく行きます。

そは神の生命と愛を得んと求める人々のため、

かの十巻をみ霊に在つて書き終わつたから。

私はその意味において、ある仕事を人々のためにやりました。私がやったのではない。キリストがさせてくださったんだ。

之に反して私は世を去り得ない、

わが最後の課題を成し遂げるまでは。

日本が未だ著わしたことのなからう一つの詩を。

然りかかる矛盾が却て私を魂の為楽の中に置く。」

だから、あせらないです。

「もう今日さよならで、アーメン・ハレルヤ」

ということ。それから、

「絶対にこの詩を終えるまでは私は死ぬわけにはいかん」ということ。

ダンテやゲーテは詩を完成しました。あの『神曲』や『ファウスト』は凄い。けれども、ダンテとゲーテを両方も本当に掴つかんでいるようなものは他にいない。大体、ダンテとゲーテは両極みたい性格の違う男だから。それを両方の大詩人を掴むという、とんでもない



やつなんだ、私は。

完成しているけれども、なおそれでも未完成なんです。彼らは筆を擱いたけれども、それでも未完成です。人間の完成は、未完成性を持つていなければ本当の完成ではない。限りなきものをその中に持つている。そういう意味において未完成なんだ。

こんどは、形の上で未完成のものがある。未完成交響楽。形の上で未完成だが、実はそれはもう全きものをその中に持つている。

「三日月が満月を抱いている」

と言ったでしょ。そういう未完成でなければダメなんです、未完成と言つても。藤井先生の『羔の婚姻』はそういう質たちを持つているね、大した詩です。

聖霊の力を身をもつて証しなければ、死ぬわけにいかんですよ。使徒たちの信仰と言つているかぎり、お題目で言っているんじゃないんだから。

未完成でも、完成でもいいよ。とにかく、その中に完全性をいただいているんです。

「父の全きがごとく全かれ」

というのは、キリストは

「父の全きをお前たちにやるよ」

ということなんだ。

だから、これが本当の「為樂」の世界です。「いろはにほへとちりぬるを」という、あれです。「寂滅じやくめつ為樂つらいらく」という。

「太陽は如何なる天候に際しても彼女らしく輝いている。

み霊に在つて私はどんな状況下でもこの山とうはんを登攀する。

山頂を極めるには、十二星霜は要するであらう。」

星辰月華ほほえが幾夜もわが幕屋に微笑みかかる。

血と涙を以てこの詩を書き終えた暁には、

これを十字架の主の御前に捧げよう。」

(1989年7月30日 天海作)

そういうソネットです。

### ●「主さまー」の一言

我々は、とにかく、キリストから離れていると、やつつけられる。躓いたり転んだりするけれども、その時に、

「私はまだダメだ」

と思うことはない。すぐ、キリストの中に入りなさい。

「主さまー」

と一言、全存在で叫びなさい。なにも大きな声を出さなくたっていい。そうしたら、キリ



ストは無条件に受けとつてくださる。そういう世界ですよ。

「まだまだ、ダメです。もう少し聖書を勉強してから、もう少し人を愛してから」なんて、そうじゃないんだよ。直ちにその現実に入る。

我々の救いの根拠はいずこにあるか。どこかで感嘆しましたか。『聖書は大ドラマである』（著作集第十巻）のイザヤ書のところ、「8月2日」の項にある。非常に大事なところですよ。家に帰って読んでみてください。救いの根拠は我々のためではない、神自身のためだということ。あれだけはつきりしているのは新約聖書でもなくらいだ。凄いよ、イザヤ書は。一切は神の御名が根拠であり、その道であり、その目的である。

「神より出でて、神によりて、神に帰るなり」

とパウロが言ったその世界です。こつち側のどうのこうのではない。何かできたら、

「それはみんなキリストの力のお陰でございます」

と、それだけのほなしだ。皆さんは掛け替えのない存在ですよ。そういう使命のある存在ですから、人の目にどう映ろうが。

とうとう、最後には、

「サタンよ、退け！」

だ。それで、サタンは逃げて行ってしまった。とてもキリストにはかなわないと。キリストはこういう戦いをなさった。サタンはいろいろな形をして現れますからね。良きそうな、まるで天使みたいな、白きサタンなんか、言葉巧みに近づいてくる。それを煮詰めてみると、結局、あの三つの動物になってしまう。そのどれかなんです。

だから、

「キリストに帰る」

と言ったって、さつきから申し上げているとおり、

「主さまー」

の一言なんです。私たちは、「南無阿弥陀仏」でも「南無妙法蓮華経」でもない。あれも素晴らしいよ、あの二つの言葉は。けれども、私はもう「主さま」という一番短い言葉、これでもいいんだ。「主さま」でもって、全部、キリストの中に自分を入れてしまう。そこから展開してくるから。

### ●人生の大肯定

夜、独りで詩を書くときに、瞑想していると、とても楽しいね。次から次へと湧いてくる。私は夜型だから。だから、早天祈祷会はしらないんだ。

「どうも、早天祈祷会に出ないと、申し訳ない」

なんて、なにが「申し訳ない」か。本当の自分に偽らない生き方をしてくださいよ。

結婚しようがしまいが、再婚しようが、三婚しようが、どれだっていいよ。一人ひとり、



それぞれの路<sup>みち</sup>だから。要するに、本当にキリストを生きるために、一人ひとり人生のドラマを、その人らしいドラマを歩かせられる。ひとつも後悔することはない。人生の大肯定です。なぜ、人生の大肯定ができるかというと、キリストを持っているからなんです。

私は、27歳で仆れた兄貴、その後で失明した母、これは生涯忘れることができない。忘れることのできないどころではない、本当にこの犠牲におけるところの私の生涯ですから。キリストを証<sup>あかし</sup>しないでは、兄にも母にも申し訳ないわけです。それが本当の親孝行ということですよ。

皆さんも、むしろ、人生のマイナスの経験を本当にキリストへの跳躍台としなさいよ。マイナスこそ本当のプラスになるんだから。いわゆるプラス・マイナスではない。絶対プラスなんです。もう烈々たるもので、どうにもなりません。

日本は火山国だ。火の如き人になれ。

「聖霊と火をもってバプテスマする」

と書いてある。火の霊をもってバプテスマするということです。聖霊はまた、一面は水だよ。真清水。そこらの水よりもっと凄い水。いや何とも表現できない。だから、結局、詩でもって表現するより仕方がない。

## ● 神のもの

「神さまを主としなさい」

とキリストが仰った。私たちはいろいろなものを持っている。これもキリストの<sup>もの</sup>有、神有、神のものです。私有も公有も全部、神の有です。次の世界に何を持っていくんですか、皆さん。裸一貫でしょうが。その中に聖霊がなかったなら、どうするんですか。土地問題でガタガタやっている。まあ本当にかわいそうだよ、日本人というのは、こんな情けない国民かと思つて。何でも持つて行きやがれと。

「我々自身がキリストの<sup>ふみ</sup>書だ」

とパウロが言った。その通りです。

「主権在民」ではない。主権在神なんです。主権は神に在り。政治の世界であろうと、学問の世界であろうと、何の世界でも、本当の主体は神さまです。「国民の意思を聞いて」なんて、政治家は体裁でもつて言っている。

「神の意思を聞け」

というんだ。「国民の意思」ではない。そういうはつきりした政治家が出てこなければダメだ。後期集会第一回の私の気合がわかったでしょ。それでいいんです。

## ● 詩「人は誰しも」(召団讃歌A55)

私は讚美歌「人は誰しも」(召団讃歌A55) というのを作つたので紹介します。(独唱)



- 1 人は誰しも  
互いに美点  
落度見棄てて  
雲は遁げゆき  
人は誰しも  
されど互いに  
交わるところ  
そこに花咲き  
人は誰しも  
不遇の時に  
愛し降り  
天の涙に  
人は誰しも  
パリサイになる  
かかるときしも  
語り合うこそ  
十字架の贖罪に  
うちに聖霊の  
さればいかなる  
忍び荷いて
- 2 長所と短所よ  
みとめ合い  
交りゆけば  
陽は光る  
躓くものぞ  
ゆるし合い  
喜びが湧く  
鳥歌う  
ドラマの中ぞ  
思い遣り  
助くるところ  
虹が立つ  
噂や陰口で  
虞れあり  
十字架のもと  
いと善けれ  
救われし我  
力あり  
誹謗も迫害も  
祈りぬく
- 3 五三の預言  
三五の現実
- 4 五三の預言  
三五の現実
- 5 五三の預言  
三五の現実
- 6 五三の預言  
三五の現実
- 7 五三の預言  
三五の現実
- 8 五三の預言  
三五の現実

〔注 五三 〓 53章のこと〕  
〔注 三五 〓 35章のこと〕

(1989年8月20日作)



(参考)

## 『聖書は大ドラマである』(著作集第十卷)より

● 「8月2日」 雲散霧消の賄罪 (イザヤ43、44)

ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、

イスラエルよ、汝を造った者今こう言い給う、

「恐れるな、我は汝を贖った、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有である。」(イザヤ43・1)

我こそは我自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない」(イザヤ43・25)

汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。(イザヤ44・21)

我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如くに散らした。汝われに回

帰せよ、我れが汝を贖ったのだから。(イザヤ44・22)

福音は現在に関わるから「今」といつているのに注目。その「今」に於て既に贖われてある。だから何も恐れるに及ばない。神は私たち一人一人の名を呼んでおられる。「おまえは私の有だ」と本願の愛がかんで下さる。神は、キリストは御自身の故に、私の罪過を消し、心に留め給わない。何たる圧倒的な愛ではないか。我々が「僕」とされるのは、こちら側の何の故でもない、恵みの撰びに由る。私の罪過は雲散霧消されている。これがキリストの十字架による贖罪のありがたさである。「エホバの僕」でありながら贖者や贖者の如きイスラエル(42・18～22)を棄てないで救うエホバである。神に回帰できるのは既に贖われてある恵みの力による。この贖罪の神に全托すれば、水火をも突破して往ける(43・2)。

